

教会年間標語

2008年全オンヌリ教会のビジョン
世と平和を与える教会
だから横浜オンヌリキリスト教会の2008年は
ひざで歩む一年

ラブレター
発行 横浜オンヌリキリスト教会 発行人: 山中知義 電話: 045-641-6468 Email: psustarai@hotmail.com
住所: 〒231-0012横浜市中区相生町3-63 ヲオマサビル4F HP: yckdhanonnuiri.org

心がけよう 三つの霊性

肯定の霊性 ヨハネの福音書11:14
「信じるなら、あなたも神の栄光を見る」
奇跡の霊性 ルカの福音書18:27
「人はできなにとが、神はできる」
期待の霊性 ヘブル人への手紙11:6
「神は報いて下さる方である」

爆発伝道との出会い

山中知義牧師と爆発伝道の出会い

私は1988年に、私は一人のアメリカ人宣教師婦人から、福音を聞きました。
湯ききった私の魂はイエス・キリストの福音にすぐ応答しました。
その夜、一人で宣教師からもらった「四つの法則」というトラックを握り締めて泣きながら、イエス様を、罪からの救い主としてお受け入れしたのを昨日の日のように覚えています。
その直後、私は、その宣教師のお世話で、米国に高校留学することになりました。
それから三年間、私は多くのクリスチャンたちに囲まれて、信仰を妨げるもの少ない環境で過ごしました。
しかし、米国の高校を卒業し、帰国した私は、あっという間に教会から離れ、世の価値観に飲まれて行きました。
そんなある日、第一次湾岸戦争が勃発したのです。
それから間もなく、私の在米中に親しくなった友人たちが次々に中東に派兵されて行きました。
私はこれを「対岸の火事」のように見る事ができず、深刻に受け止め、様々な思いに駆られました。

しました。
気の良いトラックの運転手が私を広島まで乗せてくれました。
広島では原爆の凄まじい被害の記録を見ることになりました。
塞ぎそうな気持ち、もっと塞ぎそうになり、私は急いで広島を後にしました。
旅の最後に到着したのは長崎でした。
行かなくても良いのに、なぜか、私は原爆記念館を訪れていました。
今思うと、神は、私があえて見ないようにしているものを、首根っこを掴んでよく見せようとしていたのだと思います。



長崎の原爆記念館の出口で、私は自分の心が壊れてゆくのを感じました。
多くの人前であるにも拘らず、私は涙を押さえることができませんでした。
翌日、私は夜行バスで帰途につきました。
バスの中、私は問い続けていました。「神がいるならなぜ?」「神が愛ならなぜ?」「聖書は本当に真理を語っているのか?」しかし想いに浮かぶのは、湾岸戦争で死んだ兵士や市民たちの写真。
そして広島と長崎の惨状。
神の声らしきものは皆無でした。
その代わり思い出したのは哲学者ヘーゲルの言葉でした。

「人間が歴史から学べることは、人間は歴史からは何も学べないということだけだ。」(フリドリヒ・ヘーゲル)

何と絶望的な言葉でしょう。
しかし私がこの旅で見えたものは、その事実を裏付けるものばかりでした。
私は、この探究の旅の結論に近づいていました。
神はいない。
聖書はでたらめだ。
棄教し、前進しよう。

ところが、この旅路はまだ終わっていません。
疲労困憊した重い体を引きずって、私は住んでいた四畳半のアパートに帰りました。
背負っていたバックパックを「ドサリ」と下した瞬間、私は、崩れるようにその場に座り込みました。
二月の寒い時期です。
私はこたつに入りました。
すると何と、こたつが暖かいのです!
二週間も家を空けていたのに、私はこたつを消し忘れて出かけたようなのです!
しかし木造の古いアパートです。
私は出発前に確実にガスの元栓と電源(キッチンの上に設置されていた)を切ったのを覚えていました。

ではなぜこのこたつがついているのか。

次の瞬間、今度は私の目に

「我、限りなき愛をもて汝を愛せり」(エレミヤ記31:3)

というみ言葉が飛び込んできました。
それは何年も前に、高校の恩師(珍しくクリスチャン教師だった)が、半紙に墨で書いてくれたものを私が壁に張っていたものでした。
その瞬間、やり場を失っていた感情が噴き出しました。
こたつは、私の冷え切った体を温め、まるで優しい羊飼いの腕の中にあるようでした。
私はようやく、このこたつが、神様による「しるし」だと知ったのです。
私は泣いていました。

そのとき、ようやく神様の想いが聞こえてきました。

「神がいるならなぜ? 神が愛ならなぜ? 聖書は本当に真理を語っているのか? とお前は問うが、それに答える前に、お前自身に問う。 人間に...罪はないのか?」

私は、今まで本当に心の底から「悔い改め」たことがありませんでした。
人間は地獄に落ちねばならないほど「悪」だとは思っていませんでした。
しかし、この二週間で見てきたもの、いや見せ付

けられてきたものは、「人間には罪があり、その責任を神から問われている。私たちは、神に対し負債を負っている」ということの一つの「しるし」だったのです。
それなのに、私は「だから神はいない」と逆の結論に向かっていました。
私は方向転換する必要がありますと気付きました。
そして初めて、自分は地獄に落ちるべき者であるという認識から、神に祈ったのです。

すると十字架がこれまでにない意味を持つ存在として輝き始めたのです。

十字架とは、絶望しなければ理解できない真理だということ始めて悟りました。

私の探求の旅は、こうして平安と喜びの結論に到達したのでした。

私はそれから間もなく、万感の思いで「洗礼」を受けました。
そして再び、渡米し、大学に入りました。
専攻は「報道写真」でした。
しかし入学して三ヶ月後、私の人生を、さらに大きく変える出来事が待っていたのです。

それが『爆発伝道』でした。

ある日曜日、いつものように教会に行くと、友人が、「トモは今日から、爆発伝道のクラスよ」と言うのです。
それまでは留学生のためのバイブルクラスに通っていたのですが、その日から違うクラスへ行けと言うのです。
しかし「爆発伝道」のクラスは登録制で、私には申し込んだ記憶がないのです。
しかし確かに、私の名前が登録されていました。
未だに誰が登録したのかわかりません。

仕方がないといった気持ちで、そのクラスに向かいました。
それは、個人伝道の方法を指導するクラスでした。
伝道に関心が無かった私は、とても困りました。
人前で喋ることは苦手でしたし、しかも英語で伝道するなんてとても自信がありませんでしたし、想像さえできませんでした。

しかし、翌週の水曜日には早速、

「神がいるならなぜ?」「神が愛ならなぜ?」「聖書は本当に真理を語っているのか?」

私は、連日、このような疑問と向き合い、クリスチャンとして生きてゆくべきか、あるいは棄教すべきか悩みました。
聖書が本当に神の言葉なら、そしてキリストが本当にメシアなら、これは一大事だと言わねばなりません。
しかしもし違ふのなら、私は信仰を捨てて前進するつもりでした。
私は答えを求めて一人旅に出ることにしました。
神がいるなら、そして聖書が真理なら、「しるし」がきくと与えられると思ったのです。

私は住んでいた兵庫県から、一人歩き始めました。
三日間野宿しながら歩き続けました。
その間、私はずっと神と戦っていました。

「神がいるならなぜ?」「神が愛ならなぜ?」「聖書は本当に真理を語っているのか?」三日目、岡山県のある田舎町で、私は遂に歩けなくなってしまいました。
靴を脱ぐと大きく皮がめくれていました。
私は、そこでヒッチハイクを

--	--	--	--